

書 評 会

大森正樹 著『エネルゲイアと光の神学

——グレゴリオス・パラマス研究』（2000年）

秋山 学 著『教父と古典解釈——予型論の射程』（2001年）

司会 九州大学 谷 隆 一 郎

（於 北海道大学 2001.11.11）

司会報告

ビザンティンの伝統の現在

谷 隆 一 郎

今回の書評会では、大森正樹氏の『エネルゲイアと光の神学——グレゴリオス・パラマス研究』（創文社、2000年）と、秋山学氏の『教父と古典解釈——予型論の射程』（創文社、2001年）の両書が取り上げられた。はじめにお二人の著者からそれぞれの著作の主旨、基本的な問題関心が改めて提示され、互いの質疑応答があった後、会場の方々からの意見と質問、それに対する各著者からの応答が活発に展開されて、実りある学的対話の時を共有し得たように思う。

二つの著作は扱われた対象も探究の方式も相当に異なるものであるが、東方・ギリシア教父、ビザンティンの伝統が歴史的にも本質的にも、極めて重要な意味を担っているという把握において共通しているであろう。大森氏の著は、十四世紀アトス山の修道者・神学者たるパラマスの神認識の問題を、往時の凄まじい論争の中心的位相を見据えつつ探究・展開したものである。が、それは同時に、人間の自然・本性の成就としての神化の問題、すなわち万人にとっての救いと完成の道、その可能性と根拠の問題を探究したものであり、今日にあってもすべて道を求める人々にとって真に傾聴すべき洞察を藏したものと思われる。他方、秋山氏の著は、ビザンティン時代における人文主義の成立と神学をフォティオス、アレタスといった人々に即して見定め、さ

らに根源に遡って、オリゲネス、カッパドキアの教父たち、証聖者マクシモスの終末論と神化の問題を論じ、あるいはアレクサンドリアのクレメンスによる古典解釈の位相を明らかにしている。それは総じて、キリスト教世界における古典古代の受容と拮抗、ある意味での超克の姿を見事に浮彫にしたものであるが、学的領域が多分に分化した従来状況に対して小さからぬ問題を投げかけているのである。

東方・ギリシア神父、ビザンティンの伝統は、むろん単に過ぎ去った偉大な思想潮流というに留まるものではなく、そこでの万物の自然・本性とその神化といった主題は、今日における応用倫理、環境などの諸問題に対しても根本の視座を提供するものとなり得るであろう。ともあれ、この度の集いが一つの機縁ともなっており、今後この分野の研究がより多くの人々によって共有され、よりよき探究と対話が促進されてゆくことを共々祈念したいと思う。

質疑応答の概要

田島照久氏

パラマスによれば神の本質（ウーシア）の認識不能性と人間神化の可能性が無矛盾的に主張される聖書箇所が「タボル山上での主の変容」の記述ということになるが、この場合弟子達は神のエネルゲイアを受け「霊的感覚」によって神を認識したことになる。働きを受けたものは働きを為したものと一致すると著者が語っていることに従うとこの弟子達は神のネエルゲイアに与かり、神を光として認識する者、即ち人間神化を成就した者となる。通常神のエネルゲイアは聖霊によって与えられるとされるが、この時の弟子達には聖霊はまだ下っていない。（聖書の文脈ではキリスト昇天後）パラマスはどのように解釈をしているかが第一の質問。次に人間神化を成就した人間についてパラマスはどのような用語、表現をもって語っているのか。そして人間神化はこの世の生において一般に成就可能なこととして理解されているのかどうかをおうかがいたい。

クラウス・リーゼンフーバー氏

（大森先生へ）

東方教会の靈性においてグレゴリオス・パラマスによって「身をもって祈る」と言

われるが、その具体的な仕方についてお尋ねしたい。特に「イエスの祈り」の場合、イエスの名への呼びかけと憐れみの祈願を合わせた短い定式を呼吸に合わせて繰り返す、その祈りを心臓（心）に導き入れるが、こうした祈り方の起源を4世紀（マカリオス、エウアグリオス・ポンティコス）まで遡ることができるようである。ヘシュカズムでは特別な呼吸法・精神集中・姿勢のとり方・坐り方を用いたか、でなければ「身をもって」とはどういう意味であるかを教えていただきたい。

（秋山先生へ）

ビザンツでは古典古代思想、つまり古典ギリシア哲学をどのような仕方と機関でもって受け継ぎ伝達したかをお尋ねしたい。特にコンスタンティノポリス・アカデミー（大学）の起源と発展、その教育課程、及ぼした影響についてである。このアカデミーでは小規模であるが古典の伝統が続いていたが、キリスト教神学が課程に含まれていなかったため、また神学思想の方では哲学的理性を受け入れなかったため、ビザンツにおいて神学と哲学の相互接触がほとんどなく、どちらも新しい発展をわずかしき示さなかった。似たような現象はアラブ世界にもあって、そこではイスラーム神学は哲学を受け入れることを拒んだので、信仰理解が進展せず、化石化したと言われる。他方、ラテン西方においては古典古代の伝統が修道院内にも継承され、特に13世紀以来アリストテレス哲学を内容とする学芸学部と、聖書・教父の伝統から出発する神学部は同じ大学において共存・競争し、両学部の間の場合により激しい議論が起こったため、哲学も神学も創造的に展開されるようになったと考えられる。この問題を背景にしてコンスタンティノポリス・アカデミーの位置付けと役割をもう少しご教示いただきたい。

宮本久雄氏

（大森先生へ）

「神が人になる、そのおかげで人が神になる」という自然の則を超えた現実と直面したとき、その現実との邂逅は言葉によってもたらされるのであろうか。パラマスがその現実と邂逅したとき「AはAであってかつAに非ず」「東方の論理」が同時に語り出された。しかしその言明がそのままでは如上の畏怖すべき現実と同様に、われわれにとって耐えがたい表現にとどまる。その現実をバルラアムのように西欧的論理に則って処理しないとすれば、今日のわれわれがその異質な現実と邂逅するためにどの

ような語り方が語られるのであろうか。あるいは受肉や神化に関して、(ライブニッツが最善観によって説明したように) 諸可能性の現実化として説明し^{おぼ}了なければ、どのような現実化の言語がわれわれに語り出されるのであろうか。

(秋山先生へ)

予型論も同様の畏るべき秘義に直面すると思われる。というのも、トラーという巨大なユダヤ教の言語宇宙に対して自らを「新約」としたとき、そこにある仕方でもトラーとの邂逅が成ったともいえる。あるいはトラーの同化やそれとの架橋が成ったともいえる。その同化・架橋の論理がキリストを中心におく予型論なのであろうか。しかもその予型論はギリシア、ローマ文学にまで適用されるとき、そこでは何か文化的な他者征服が起っていないのだろうか。そうでないとすれば、予型論は新約テキストの特異性と時間軸上の予型で解説し切れないキリストの謎を逆に問い返すのではないか。キリストは打ち手のこづちではない。

以上両先生には異質なもの(神と人、異文化、異文書)の邂逅をもたらす言語の用法やその機能・身分に関し問いをたてた。

著者コメント———大森正樹

パラマスが、神学的にか、靈性としてであるか、あるいは体系的にか、非体系的にか、何らかの総合を14世紀に成し遂げたことは、確かであると考えられる。そしてそこに提出された説は、何か目新しいもの、あるいは新奇なものではなく、むしろ古代教会より受け取った思想の線上にあるものだと、一群の研究者がすでに指摘したことは正しいであろう。しかしもしパラマスに独創を見出そうとすれば、それはこれまで歴代の教父や靈的師父たちがその場その場で神認識に関して述べてきたことを、神の「ウーシア」と「エネルゲイア」の区別という仕方でも説明しようとした、まさにそのことにある(たとえこの二語をすでに多くの神学者が様々な意味で用いていたとしても)。

パラマスにとり最重要事は神に至るために祈りを深めることであつた。彼が親しんだ祈りは遠くエジプトの砂漠で修行した一連の世捨て人やシナイの荒れ野で孤独のうちに精神を鍛錬した人々の伝えた「イエスの祈り」あるいは「心の祈り」である。こ